

女性を愛する女性の自己認識について —多様化するセクシュアリティを軸に—

甲田 知海

近年の性の多様化によって、現代のセクシュアリティの概念はLGBTといった単語にとどまらず、LGとBとヘテロの間等を細かく段階分けしたものも見られる。さらに性的指向と恋愛指向を別次元のものとしてとらえ、それらを併用することで自身のセクシュアリティを表す場合もある。

セクシュアリティの概念が多様化することによって、自身を表すにふさわしいと思われるセクシュアリティの検索や、自分と同じまたは似た属性の他人の探索など、様々な面で影響を及ぼすと考えられる。そこで、セクシュアリティから見る性の多様化・細分化に伴って性的指向がどのように形成されるのかを明らかにし、性の多様化の今後の在り方を考察する。

本研究では半構造化インタビューによる質的調査を行った。調査対象者は、以下の3つの条件をすべて満たす7名である。①性自認が女性である。②女性を性的あるいは恋愛的理由で魅力的だと感じたことがある。③対象者自らが性的あるいは恋愛のセクシュアリティにおいて自身を「同性を好むセクシュアリティ」を含むと認識している。

今回の対象者の性的指向の内訳は、レズビアン4名、バイセクシュアル2名、パンセクシュアル1名である。結果として、対象者全員が同性愛的な感情に許容性の高い環境や理解者を得た経験があった。自身がマイノリティだと自覚した経緯は、自分からマイノリティなのではないかと疑念をもって検索した能動型と、告白などマイノリティからの接触を受け入れた受動型に分けられた。また、特に2名は理想とする性的指向と実際の性的指向の間に乖離が見られた。他の者も含めて、こうありたいという理想と、経験から得た所感とのズレが多くの対象者に見受けられた。

性的指向の形成に関して、周囲の自身以外のマイノリティの存在や、友人、パートナーなどの理解者がいたかどうかということが大きな役割を果たしていた。文献やインターネットなどで検索することよりも、自身がマイノリティとして生きることを想像しやすい環境にあったことが性的指向の自覚・決定へと大きく作用したのだと想定される。

インタビュー対象者は7名中5名が分類に対して主にアイデンティティの側面から肯定的な意見を述べており、現状分類は個々人に対して役割を果たしていると言える。しかし、自身の理想としている指向と、実際の指向との間にズレが生じる場合がある。それによって、理想を実態に近づける場合に、そこにもまたズレが生じる、といった現象が起きうる。また、自己認識は実態を理想へと近づけようとするために、理想と現実とは常にズレが生じ続ける。その上で細かく分類しようとする、こういったズレはとらえることができない。この場合、性の多様化において、結果的に分類は無意味なものになると考えられる。

(指導教員 後藤 嘉宏)